

一般社団法人 岩の力学連合会
平成 29 年度・第 4 回理事会 議事録

日時	平成 30 年 3 月 30 日 (金) 10:00-14:40	場所	資源・素材学会会議室
----	----------------------------------	----	------------

理事会	理事長	新 孝一	○	理事	奥野 哲夫	○	理事	西村 強	○
	副理事長	岸田 潔	○	理事	清木 隆文	○	理事	芥川 真一	○
	幹事長	岡田 哲実	○	理事	森岡 宏之	○	理事	長田 昌彦	○
	理事	谷 和夫	○	理事	児玉 淳一	×	理事	下田 直之	○
	理事	小山 倫史	○	理事	伊藤 高敏	○	理事	横尾 敦	○
	理事	齋藤 禎二郎	○	理事	佐藤 晃	×	理事	高瀬 昭雄	×
	監事	西本 吉伸	○	監事	細野 高康	○	ワブサバー	清水 則一	×
	ワブサバー	安原 英明	●	ワブサバー	藍檀 オメル	○	事務局	富田 明日香	○

敬称略順不同, ○: 出席, ×: 欠席, ●: スカイプ出席

配 付 資 料

資料番号	頁	資 料
資料 29-理 4-01	1	平成 29 年度・第 3 回理事会 (書面審議) 議事録 (案)
資料 29-理 4-02	2	平成 29 年度・第 2 回理事会議事録
資料 29-理 4-03	7	平成 29 年度・第 3 回常任理事会議事録 (案)
資料 29-理 4-04	12	会員の入退会
資料 29-理 4-05	16	第 5 回若手研究者国際岩の力学シンポジウム&革新的未来のための岩盤工学シンポジウム組織委員会 規則 (案)
資料 29-理 4-06	18	RDS2019 の開催準備報告
資料 29-理 4-07	21	編集委員会
資料 29-理 4-08	25	連合会賞選考委員会
資料 29-理 4-09	34	賛助会員特別会議
資料 29-理 4-10	61	火山地域の応用地質と岩の力学に関する国際ワークショップの共催
資料 29-理 4-11	73	岩盤力学シンポジウムへの参画計画について
資料 29-理 4-12	74	賛助会員特別会議提言を受けた活動について
資料 29-理 4-13	75	平成 30 年度事業計画と予算 (案)

【議 題】

- 第 3 回理事会 (3/9 書面会議) 議事録の承認* (岡田) 資料 29-理 4-01
修正なく議事録は承認された。
- 第 2 回理事会 (10/23) 議事録の承認* (岡田) 資料 29-理 4-02
既に書面審議 (3/9) において承認された議事録であるが、次の 2 点の修正があることが報告された。
 - 配布資料一覧において、資料 29-理 2-27 が抜けていたため加えたい。
 - 議題 11 の国際シンポジウム Rock Dynamics について、シードマネー 140 万円と記載されているが 150 万円の間違いであったことがわかったため、修正したい。
 上記 2 点を修正することで議事録は承認された。
- 第 3 回常任理事会 (1/29) 議事録の確認 (岡田) 資料 29-理 4-03
議事録の内容が紹介され、以下の議論があった。
 - 会員の入退会に個人名が記載されているが不要ではないか。
 - 個人名は削除し、人数のみ記載することとしたい。
 - 議題 7 の 1) に関連し、安原先生が ISRM Franklin Lecture に選ばれたという連絡があり、シンガポールで開催される ARMS10 で授賞式とレクチャーが行われることになった。
 - 議題 7 の 2) に関連し、Muller Award の推薦が今のところない。
 - 議題 8 の 3) に関連し、岩の力学ニュースを RockNet 上に掲載するために、会員限定ページを作ることが可能かどうか、小山先生に検討をお願いしたい。

4. 会員の入退会の承認※（岡田） 資料 29-理 4-04
 常任理事会（1/29）において、平成 29 年 10 月 24 日～平成 29 年 1 月 29 日までの入退会状況が示され、その後説得を試みた結果として、正会員 7 名の退会を承認した。また、平成 29 年 1 月 29 日～平成 30 年 3 月 30 日の入退会が示され、賛助会員 2 社と正会員 3 名の入会を承認した。退会希望の 10 名のうち、5 名については慰留の説得を試みることとなった。よって、退会については次回の常任理事会で承認することとなった。
5. 第 5 回若手研究者国際岩の力学シンポジウム&革新的未来のための
 岩盤工学シンポジウム組織委員会 規則の改正案の承認※（安原） 資料 29-理 4-05
 前回理事会（書面審議 3/9）で承認された規則について、監査委員の明示と存続期間の終了日の変更の修正が提案された。特に質疑はなく、承認された。
 また、4/17 に合同の組織委員会と運営委員会が開催されること、JNTO の申請が終わったことが紹介された。
6. 国際シンポジウム Rock Dynamics2019 について（藍檀） 資料 29-理 4-06
 開催準備が報告され、Bulletin 2 が紹介された。また、Web ページについては、「2019RDS」ドメインを有料で確保し、4 月の初旬に公開する予定であること、会場を少し大きなホールに変更する予定であることが報告された。さらに、Abstract や Full-Paper の Template について、トロンハイムで 2018 年に開催される Rock Dynamics 3 のものを使用するか、日本で開催された ARMS8 のものを使用するか検討中であることが報告された。これに対して、以下の議論があった。
- Q. Bulletin について、表紙の International Society for Rock Mechanics の後に and Rock Engineering が
 必要である。
 A. 修正したい。
 Q. 参加費の記載がないがよいか。
 A. 参加費の記載については、少し遅らせたい。寄付金等が集まるようであれば調整したい。
 Q. 予算書の中の記載はどうなっているのか。
 A. 5 万 5 千円である。寄付金が集まれば、5 万円にしたいと考えている。
 Q. Web ページの確認が今できないので、後日サイトを教えていただき、意見をいただくという
 ことでよいか。
 A. よい。
 C. Template については、シリーズで出版社との関係もあるし、OnePetro にも上げないといけないの
 で、ARMS8 のものを使う必要はないと思う。
 A. Template については、Rock Dynamics 3 のものを使用したい。査読の方針等について意見はある
 か。
 C. 査読の方針等については組織委員会で決めていただければよい。
 C. 会場の変更については、予算の範囲であるなら問題ない。
 A. 会場費は 30 万円くらい増加するが、何とかかなと思う。
 C. 予算の変更があれば、予算書を更新したものを理事会で報告していただければよい。
7. 平成 30 年度事業計画・予算案について※（岡田） 資料 29-理 4-13
 平成 30 年度事業計画案と予算案について、本来、本日の理事会で承認いただく必要があるが、まだ
 詰めきれていないため、本日は概略の案を紹介し、後日に書面会議で審議とさせていただきたい旨
 が紹介された。まず、事業計画に関して説明があり、以下の議論があった。
- C. 事業計画案の(2)国際技術委員会の 3)ISRM Commission の Suggested Method for the Complete Stress-
 Strain Curves of Rocks in True Triaxial Compression は既になくなっている。
 C. AE の Suggested Method にも藍檀先生と石田先生が参加している。
 C. 真三軸の Suggested Method も始まる予定で、鈴木さんが参加することになっていると思う。
 Q. 各委員会の事業計画は、各委員会から提出してもらうのではないか。
 A. 本日の理事会の後に、各委員会に修正していただく予定である。
 Q. 編集委員会から最近似たような依頼があったように思うが別物か。
 A. 岩の力学ニュースの 2 回のうち 1 回は各委員会の活動報告を掲載することになっており、この
 件とは無関係である。
 C. 国際技術委員会のところに多くの記載があるが、実際に動いているのは若手技術者の海外活動
 助成のみであり、その他については理事会で議論しているものだと思う。
 C. Suggested Method for In-situ Shear Test の立ち上げの際には、国際技術委員会の前委員長の鈴木さ
 んに背中を押していただいた。
 Q. ISRM の Commission への支援と記載されているが、どういう支援が期待できるのか。

- A. 例えば、日本で情報を集めるためにサブワーキングを作ることができると思う。
- C. 何かニーズが発生した時の受け皿だと思う。恒常的にサブワーキングを行うというよりも、不定期に実施し、後で理事会にその報告してもらうようなイメージだと思う。
- C. 桜井先生の **Underground Nuclear Power** もあると思う。日本人が入っているものは結構あると思う。
- C. **JSRM** として、日本人がどのくらい関与しているか把握できていないことが問題である。
- C. **Web** を見れば把握はできるが、どのような活動を行っているかはわからない。
- C. 以前に鈴木さんから何処の **Commission member** になっているか聞かれたことがある。情報を集めていたのではないか。**JSRM** としてきちんと把握しておいた方がよいと思う。
- Q. 日本人の参加の調査を横尾委員長にお願いしてよいか。
- A. 承知した。ただし、この事業計画への記載については、「**ISRM Commission** への積極的参加についての支援」のみの記載にしていきたい。
- C. それでいいと思う。
- C. **Commission** が構成させた時、日本からメンバーが欲しいという話が出てくる場合がある。その場合、個人ベースで連絡をとるのか、**JSRM** として推薦するのか、はっきりしない。問い合わせ先がある方がいいと思う。
- C. 国際技術委員会がそれを担うのはよいと思う。
- C. **JTA** (日本トンネル技術協会) は **ITA** (国際トンネル技術協会) 総括ワーキングでそれをやっている。
- C. **ISRM** の窓口は **JSRM** しかないので、もう少し積極的に関与した方がよい。
- C. **JTA** は、一泊分のサポートがある。
- C. 事業計画案の 5.**ISRM** 事業への参加・協力と 6.国際交流は、全体の構成から浮いている。この2項目以外は、理事会、幹事会、委員会が項目となり、その中で実施していることが記載されている。5.と 6.をきちんと実施するというのであれば、国際技術委員会の中に記載してもよいと思う。
- C. 事業計画の 2~4.は組織概要、全体として実施することが、5.と 6.という考え方で書かれている。
- C. 理事会や、委員会の下に実施することである事業計画を記載した方がいいのではないか。
- C. 5.と 6.については、理事会の中で議論しているので、理事会の下に入れてはどうか。
- C. 2~4.がひとかたまりなので、現在の構成でおかしくないと思う。
- C. **JSRM** は理事会が全てを統括している。常任理事会はそれを補助するような組織である。委員会も理事会から委託させている。なので、理事会のガバナンスを明確にするためにも、そのような書き方に変えていった方がよい。
- C. 現在の記載は、常任理事会の下に多くの実施項目が書かれているが、理事会の下に書くべきであると思う。定款上は、基本、理事会で決定することになっている。
- C. これまでは理事会では事業計画の内容について議論していなかったもので、過去の記載にならって書いていた。基本的には、定款に沿って書いてあると思う。あとは、必要な予算に従って記載されている。6.については、後で追記してしまったのかもしれない。また、4.専門幹事会は何もやっていないと思いつつ、定款に載っているの記載されている。
- C. 近年、実施していない専門幹事会を事業計画に書くかどうかは議論すべきであるが、枠としてあってもいいと思う。
- C. 理事会が一番上にあり、全部を含んだ会の運営上の諸事項を決定する。このうち、常任理事会について実施することが記載されている構成なので自然だと思う。専門幹事会も一応枠があるという趣旨である。特にピックアップしたいことを 5.や 6.に記載している。もし、一つにまとめるなら 5.の中で、アピールする所、特に **ISRM** 事業を記載する。それ以外もあるなら 6.に記載する。委員会でハンドリングしている部分が 7.以降に記載されており、すっきりしていると思う。
- C. 企業出身の立場からすると事業計画の中に何回開催するという記載があるのは違和感がある。何を実施するか、それはどこが責任を持つか、ということが重要である。例えば、国際交流と書いてあって、それはどこが責任持つのかということを考えた時に、それは理事会であり、その理事会を効率的かつ円滑に運営するために常任理事会が補佐しているわけがあるから、そういう観点で書くのもよいと思う。
- C. 5.や 6.の記載方法について意見が分かれているので、他の方の意見も聞きたい。
- C. ピックアップした内容を 5.や 6.に書いてもよいと思う。重複しないよう、若手技術者の海外活動助成以外の国際会議支援は国際技術委員会の中から削除してもよいと思う。
- C. 基本的には定款にあわせるのがよいと思う。実施内容と定款がずれてきているのなら、時間・労力はかかるが、定款を見直していく方がよいと思う。
- C. 事業計画には、具体的な項目を誰が実施しているのかという事を主体に書く方が違和感がない。正直、現在の事業計画には違和感がある。
- C. 2~6.の並びはよいと思う。国際技術委員会が実施していないことは、実施しているところに移すか、どこもやっていないなら書かない方がよい。

- C. 具体的なアイデアはないが、今年実施することが記載されており、そのために必要な予算が予算書に反映されているのがよい。ただ、だれが責任をもつのかが見えにくくなっていると思う。
- C. 事業計画という視点で見ると足りないところはあるが、実際に詳しく説明するのは予算の方なので、事業計画の方は粗々わかればよい。予算を説明する際の項目が、事業計画の方で述べられていればよい。
- C. 判断は難しいが、このままでもよいと思う。事業計画としてアピールすることも大事だと思うので、あまり難しく考えなくてもよいのではないか。
- C. 今の並びのままでよい。ただし、項目の名称については具体化した方がよいと思う。例えば、6.の項目は「国際交流」だと幅が広すぎるので、「国際会議への支援」にし、7.(2)の2)国際会議の活動支援がそれと重複してしまうので、「若手技術者の活動支援」に変えてしまえばどうか。7.(2)の3)は「ISRM commission への活動支援」とする。そのように変えれば、中身と一致すると思う。
- C. 並びはこのままで、前者の意見のように変えるのがよいと思う。
- C. 皆さまからのご意見を踏まえ、幹事長の方で案を作り書面審議となる。あまり大きな変更は難しいと思う。並びは基本このままにしたい。ただ、項目の名称をできるだけ実態に合わせるようにしたい。また、可能な範囲で予算の項目と事業計画を合わせられるように工夫したい。

次に、予算案に関して説明があり、以下の議論があった。

- C. YSRM については、2018 年度の予算がわからなかったもので、Rock Dynamics と同額の予算を計上している。後日連絡いただきたい。
- C. YSRM が申請している科研費の結果が来週わかるので、それを踏まえて回答する。また、第 5 回の若手会議については、開催するかどうかは、まだ検討していない。
- Q. 開催の可能性もあるのか。
- A. 開催の可能性はあるので、前回同様に 20 万円を計上させていただきたい。YSRM の方は科研費が当たれば、予算 0 で実施できると思う。
- C. 科研費が当たったとしても、その科研費は JSRM の予算内に入れるので、予算は上げておく必要がある。どのような補助金があっても、JSRM 主催であれば、一旦 JSRM の予算内に入る。
- Q. YSRM と Rock Dynamics の予算は既に出されているという認識でよいか。
- A. 出されているが、YSRM については、予算の年度分けがなされていなかった。
- Q. 収支はどうなっているのか。基金を使って 0 なのか、基金から借りて基金に返すのか。
- A. 基金を使って収支 0 である。ただし、管理費が入っているので、その分が戻ることになる。
- C. ARMS8 の時は、JSRM に委託してなかったもので、一般会計の方で給与やアルバイト代等にした。
- C. 以前、監査の時に、どんな事業でも事業だけでバランスしているのはおかしく、会議室などの恒常的にあるものを使っているの、5%程度の管理費をいれておいた方がよいという意見があった。結局、会議で余ったら基金に戻している。会議の中では 5~10%管理費として予算項目に上げてるが、会計としては数字は出てこない。だから、イベントとしてはバランスしており、管理費は少なくとも戻ってくるという予算書になる。このような会計のルール化を将来考えていかなければならない。
- Q. YSRM と Rock Dynamics の予算は一緒に計上するのか。一緒にするとわかりにくくのではないか。
- A. 今は一緒になっているが、分けたいと思う。YSRM は年度別の予算を示していただきたい。
- Q. YSRM は、Rock Dynamics が使用している ARMS8 のテンプレートを使用して予算書を提出していただくことは可能か。
- A. 承知した。
- C. 78 ページに編集委員会の旅費があるが、栃木ではなく、筑波の間違いである。
- Q. 東京 9 名との記載は正しいか。
- A. 今は不明である。
- Q. 賛助会員向けの講習会をやる時の謝金を計上しておいた方がよいのでは。
- A. そのとおりで、賛助会員特別会議の提言を受けた活動のために、会議費、旅費、謝金などをもう少し増やす必要があると思っている。また、岩盤力学シンポジウムのオーガナイズドセッションを実施する場合にも、謝金や交通費が必要だと思う。
- C. 予算項目を挙げておき、使わなくても構わないということなので、必要そうな予算は挙げておいた方がよい。
- Q. 今日予算案が成立しないので、4 月の活動は暫定予算として使えるというルールはあるのか。
- A. 定款の 57 条に、「第 57 条この法人の事業計画及び収支予算については、毎事業年度開始日の前日までに理事長が作成し、理事会の承認を経て社員総会に報告するものとする。これを変更しようとする場合も同様とする。」とある。次に 57 条の 2 に、「前項の規定にかかわらず、やむを得ない事由により予算が成立しない時は、理事長は理事会の決議に基づき、予算成立の日まで前年度の予算に準じ、収入及び支出をする事ができるものとする。」とある。定款の 57 条の 3 に、

「前項の収入及び支出は、その後に成立した予算の収入及び支出とみなす。」とある。定款の 57 条の 4 に、「第 1 項の事業計画書及び収支予算書類については、当該事業年度の終了するまで、主たる事務所に備え置き、一般の閲覧に供するものとする。」とある。よって、今ここで決議いただいて、順次予算を施行させていただきたい。

- C. 具体的には、YSRM, Rock Dynamics, ILC 委員会, 編集委員会, RockNet 委員会, これらの委員会開催に係わる費用と JSRM の経常的な費用となる。

以上の議論の後、定款の 57 条の 2 に基づき平成 30 年度の収入及び支出を行うことが決議された。

8. 委員会審議・報告事項

1) 編集委員会 (谷)

資料 29-理 4-07

岩の力学ニュースの次号の概要とプロジェクト報告が枯渇してきている状況が報告され、以下の議論があった。

- Q. 関西電力のラオスのダムについては既に報告済みか。
A. 報告されていない。
C. 関西電力の筒井さんに打診してみたい (岸田副理事長)。
C. 半年後くらいということで打診をお願いしたい。
C. 谷先生のところに連絡するようお願いする。
Q. 本日、賛助会員 2 社の入会が承認されたが、次号に社名を入れることは可能か。
A. 承知した。
Q. 5 月に EUROCK があるので、誰かに会議報告を頼んではどうか。楠見先生、清水先生、大成の坂井さんが参加されると言っていた。また 6 月には US-ROCK があり、安原先生が参加される。
C. 会議参加報告は 1 ページなので、安原先生をお願いしたい。
C. 承知した (安原先生)。
Q. プロジェクト紹介について、この時期に土木学会賞や地盤工学会賞が決まるので、岩盤関係があればお願いしてはどうか。
A. 承知した。

2) 国際技術委員会 (横尾)

資料なし

若手技術者の海外活動助成について応募が来ていないことが報告され、以下の議論があった。

- Q. 助成の条件として、会議に論文投稿しなければならないのか。
A. テクニカルツアーなど、論文投稿以外でもよい。
Q. 申し込み期限はいつまでか。
A. 四月末までである。

3) 電子ジャーナル委員会 (児玉)

資料なし

特に報告はなかった。

4) Rock Net 委員会 (小山)

資料なし

特に報告はないが、RockNet の会員限定ページが作成可能かどうかを検討することが紹介された。その後以下の議論があった。

- Q. Rock Dynamics の宣伝について、RockNet で紹介することは可能か。
A. Rock Dynamics で Web ページを作ってもらって、RockNet から飛ぶようにするのが一番楽な方法である。RockNet の中にコンテンツをぶら下げるのも手間はかかるが可能である。ARMS8 の時は、後者の方法であった。
Q. 時間はどのくらいかかるのか。
A. Web ページができており、リンク情報をいただければすぐ可能である。
C. 清木先生から依頼があると思う。

5) 連合会賞選考委員会* (岸田)

資料 29-理 4-08

岩の力学連合会「論文章」「技術賞」「フロンティア賞」「博士論文賞」授与規則、および論文賞、技術賞、フロンティア賞、博士論文賞の選考等に関する細則の改訂案の説明があり、規則の最後に理事会の本日の日付を入れることとして、質疑なく承認された。

また、平成 29 年度事業報告、平成 30 年度の事業計画、賞選考委員会報告が紹介された。特に質疑はなかった。

6) 総務委員会（岡田）
特に報告はなかった。

資料なし

7) ILC 研究企画特別委員会（横尾）

資料なし

4月13日に10社22名程度の参加で東北大学の佐貫先生の講演と意見交換会を実施する予定であること、JSRMのWebページ右側にバナーを付けてILC研究企画特別委員会のWebページを作ったことが報告された。

8) 賛助会員特別会議（奥野）

資料 29-理 4-09

2017年度第1回賛助会員特別会議の活動報告と提言が紹介され、以下の議論があった。

Q. 表彰制度は、長年貢献しているということが表彰の対象なのか。

A. 提案いただいたのは前副理事長の青木さんで、地盤工学会で取り入れた表彰制度を前例として紹介していた。地盤工学会では、10年と25年の2ランクで表彰される。

Q. 資料に記載の「受賞を説明しづらい賛助会員がいる」というのはどういうことか。

A. 例えば、各企業で3種類のランクによって会費が出されているが、高いランクで長年貢献したことが表彰に値するとした場合、他社よりも多くのお金出していることが会社にわかってしまい、ネガティブな発想になりかねない。

Q. 受賞を辞退することができるようにすればよいのでは。

A. 誰が辞退を判断するかが問題である。窓口で判断はできないかもしれない。

C. 提言としては、講習会と表彰であるが、P56にある自由意見も重要である。

Q. P55の上の表彰制度のアンケート結果に「特典の妙案が必要」と記載があるが、どういうものが要望されたのか。

A. 会費が免除されたり、講習会参加費が免除されるのがよいという意見があった。

Q. 会社ならば、宣伝をしてほしいというのはなかったのか。他学会では、ジャーナルの後ろに毎回会社名のリストが載っている場合もあるし、国際地盤工学会では、特別会員の会社のロゴがHPに並んでいたと思う。

A. 岩の力学ニュースで賛助会員の記事が載ったり、社名のリストが載ったりする事はメリットになっていないのではないかとの意見は出ていた。

C. メーカーや新興の会社等については、広告は嬉しいと思うが、通常の建設会社、電力会社等は宣伝にメリットがあるとは思っていない。なので、今後、メーカー等に働きかけるのはよいかもしれない。表彰を喜んでもらわなければ、賛助会員を増やす目的は達成されないと思う。

C. 表彰制度については、賛助会員特別会議運営企画特別委員会でもう少し議論した方がよい。

C. 表彰制度を導入し、5年、10年に表彰するとした場合、いつをスタートにするかが問題である。基本的にはほぼ横並びなので、一斉に表彰することになってしまうのではないか。

Q. 賛助会員の会費を安くしてほしいという要望はなかったか。

A. それはなかった。

Q. 56ページに、大学で岩盤力学の講座が無くなったとあるが、これは研究室のことか。

A. 講座ではなく、講義のことだと思う。

C. 土木系は少ないかもしれないが、資源系はまだ残っている。

C. 連合会で講習会のようなサービスをやるのは、大学としても協力しやすい。

C. 37ページ①の第2段落に記載のとおり、実務的な講習会は専門学会で実施しているので、連合会では、連合4学会の共通の基礎理論を大学の先生に講義してもらった方がよいという意見が出ていた。若手技術者の教育の内容については、次のアンケートをとって見てもよいかもしれない。

C. スイスの連邦工科大ローザンヌ校で、夏休みに集中修士コースという凝縮したマスターコースを有料で実施していた。先生は毎日変わり、その道の最前線の人がやってくる。授業料を取って超詰め込みで修士号がもらえるコースを2年に1回実施したと言っていた。3カ月間、スイスの何処かに缶詰めになって勉強して修士号をもらうというコースらしい。

C. 連携という意味では、計測のニーズもあったかと思う。調査計測、コンサルタント、大学等で実際の現場で計測を実施するのに協力できる可能性があるという意見も出た。

C. では、講習会について、議題の11、資料の74ページで継続して議論することとしたい。

9. 「火山地域の応用地質と岩の力学に関する国際ワークショップ」の共催（新）

資料 29-理 4-10

「火山地域の応用地質と岩の力学に関する国際ワークショップ」の応用地質学会との共催について状況の紹介があり、以下の議論があった。

C. 補足として、2015年に応用地質学会で斜面崩壊に関する国際会議を京都で実施し、その時の会長が長谷川修一先生だった。この会議がうまくいったので、次に火山をテーマにして4年後くら

いに国際会議を実施したいという意図で、応用地質学会の中に、63 ページに記載の「火山地域の応用地質学的諸問題に関する研究小委員会」ができた。その後、ISRM からの要請で清水先生に Volcanic Rock に関する国際会議の話があり、それならば一緒に開催できればという事で話が進んでいる。

- C. 元 JAMSTEC で神戸大学にいる巽先生が、九州南部の海底にある巨大カルデラが噴火したらどうなるかという調査をしている。講演依頼の候補者になると思われる。
- C. 前回の 2015 年のシンポジウムのプログラムを見ると、ハードロックというよりもソフトロックが中心であるように見える。
- C. 会議の中身については、今後の話し合い次第だと思ふ。
- C. 2020 年に開催する場合、資源・素材学会が次期理事会の主担当となるので、JSRM のメンバーとしては伊藤先生が適任と思ふ。
- Q. 前回プログラムに Soils と書いてあるが、地盤工学会は入らないのか。
- A. 内容によっては、後援や共催で入る可能性がある。
- C. これまで Workshop として実施してきたので、今回の日本開催をきっかけに Symposium に会議名を変更してはどうか。
- Q. JSRM 側でも準備委員会を作っておくという事か。
- A. 共同で動くための委員会を作る前に、連合会としての立場で立ち上げ前の調整事項があるのではないかと思ふ。
- C. ISRM の Specialized Symposium に申請し、シードマネーを出すのであれば、会計はこちらに一本化してもらうとか、赤字が出たらどうするか等のルールも決めておかなければならない。委員会は 1 つの方が動きやすいし、お金も無駄がない。
- C. 実際に動く段階ではその通りであると思ふ。今は、その前の準備段階であると思ふ。開催時期、費用、名称、運営委員会の体制など、何か意見があれば出して欲しい。例えば、運営委員の部分に応用地質学会にお願いすれば手間はかからないと思ふ。
- C. お金だけこちらが出すのは変なので、ある程度、関与していく必要がある。JSRM に準備会を作り、案を作って理事会、あるいは常任理事会に諮ってから、応用地質学会に持っていき、交渉については最終的には理事長にお願いするというのはどうか。
- C. 61 ページに書いてあるように、応用地質学会と合同で準備委員会を作り、方針を決めるというのを 4 月に実施するイメージである。そうすると、JSRM の方針を常任理事会で決めるとなると時間的に厳しいと思ふ。ただし、必要なステップなら実施する必要がある。
- C. 原案を作って理事会メンバーにメールで見てもらい、時間があれば常任理事会で議論するというステップを進めることを認めていただくというのではどうか。
- C. 赤字が出た場合に、折半するのか、また、シードマネーの 150 万円を除いて黒字とするのか等が重要である。また、委嘱状や会計などの事務作業はどちらが実施するのも重要である。
- C. そのような事項を理事会として確認、承認していただくための案を作る必要がある。
- C. それらの重要事項を覚書にして、理事長と応用地質学会の会長がサインをするという形をとるか、あるいは、全て JSRM の方で吸収して管理する形をとる方法もある。
- C. ISRM の基本的なスタンスも大事である。ISRM として、今回の会議の分野を今後 ISRM の中に取り入れたという考え方があるかもしれない。清水先生にも確認した方がよい。
- Q. 共催だとして、応用地質学会、JSRM、ISRM、国際応用地質学会 (IAEG)、これらの共催は可能なのか。
- A. Sister Society なので問題ない。ISRM の総会では、地盤工学会にも来てもらっている。

以上の議論を踏まえ、方針の案を三役と伊藤先生で相談して作成し、メールで理事会メンバーに審議いただくことになった。

10. 岩盤力学シンポジウムへの参画計画について (岡田) 資料 29-理 4-11
岩盤力学シンポジウムの参画計画案について、従来の講演の依頼ではなく、オーガナイズドセッションを開催する案の紹介があり、以下の議論があった。

- Q. オーガナイズドセッションで発表する人は岩盤力学シンポジウムの参加費を支払うのか。
- A. 講演の場合は今まで払っていないので、講演の形式であれば支払わなくてよいと思ふ。
- Q. セッションの準備が大変だと思ふ。推薦してもらい、論文が投稿された後に発表資料の打合せとなると、時間的にも厳しいのではないか。
- A. 論文は新たに投稿してもらうのではなく、既発表のものをイメージしている。
- Q. 最大 8 編程度ということか。
- A. どの程度時間がいただけるかは、土木学会との交渉なのでわからない。
- C. 皆さんが日頃読んでる論文の中で、テーマとして新しく、将来性があると感じるものを推薦していただき、その著者に直接交渉して参加してもらうイメージである。

- C. 材料学会でもオーガナイズドセッションが一般からの投稿の形になっていたが、推薦して論文を書いてもらうのは大変かと思う。
- A. 論文は書いてもらわなくてもよいと思う。既発表したものを再構成して、よいプレゼンをして宣伝してもらうイメージである。
- Q. 岩盤力学シンポジウムでは、発表の前段階で申し込みをするが、それをスキップして、枠だけもらうということか。
- A. そのイメージである。以前と同様に講演であるが、その講演の方法が変わるだけである。
- Q. 岩盤力学シンポジウムの CD の中には PPT 原稿は入っていないということか。
- A. そのイメージである。今回のようなオーガナイズドセッションの講演を集めて、JSRM のコンテンツにしていきたいと思う。
- C. やり方として簡単なのは、岩盤力学シンポジウムの方で申し込む時に、JSRM のオーガナイズドセッションのテーマを 1 個作ってもらって、投稿してもらう方法もある。
- A. その方法だと目新しさが無いと思う。今回は JSRM でセッションをしっかりとマネジメントするイメージである。そのように主体的に実施していかないと総合的な岩盤科学技術の創生と体系化はできないと思う。
- Q. 総合的な岩盤科学技術の創生と体系化が提言されたのはかなり前だが、今でも生きているのか。
- A. それは、将来構想 2016 の中でも触れられているので、この理事会が実現する大きなテーマであることに変わりはない。
- C. 是非聞いてみたい題材があった時に、岩盤力学シンポジウムのプログラムの中に割り込んでいくというのが時間的に難しい場合には、参加者は一泊増やすことになるが、その前の日に別途開催するという事もあるのではないか。
- A. そのようなやり方もあるかもしれない。
- C. 来年の岩盤力学シンポジウムは、岩手大学で、会場の都合で 1/12 (土)、1/13 (日) の 2 日間で開催される。ただし、1/14 (月) は成人の日で休日である。
- C. そうだとすると前日開催は難しいかもしれない。
- C. 来年の岩盤力学シンポジウムは、参加者が少なくなっているので、A4、1 ページで参加できる自由討議セッションを企画することになっている。
- Q. 4 月に土木学会の岩盤力学委員会論文小委員会が開催されるので、JSRM のセッション案を提案することになるのか。
- A. 4 月 18 日に論文小委員会は開催されるので、そこで今回の企画を頭出ししたい。
- C. あらかじめ論文小委員会の委員長に相談して、言っておいた方がいいと思う。
- C. 前回の岩盤力学シンポジウムのアンケートによると、最も印象に残ったのが、口頭発表で、次が特別講演だった。つまり、特別講演はよかったという事だと思う。
- C. JSRM として、よいセッションを実施し、岩盤力学シンポジウムを盛り上げてあげることが重要と思う。
- C. 土木学会としては、JSRM の発表に人を取られて、土木学会への貢献数が減るのは嫌がられるかもしれないので、既往の発表で、もう一度聞きたいものを発表してもらうセッションで、人を集める意図があることを示すのがいいと思う。
- C. そうすると、このオーガナイズドセッションを仕切ってくれる理事を決めなければならないが、岩盤力学委員会のメンバーである方がよいと思う。土木学会担当理事でもある清木先生、可能でしょうか。
- C. 承知した。土木学会の方には幹事長から連絡して欲しい。
- C. 承知した。三谷先生に連絡を入れたい。
- C. 4/18 の午後は参加が難しい。理事で、岩盤力学委員会のメンバーである、森岡さん、小山先生と連絡をとって最低一人は参加することにしたい。

11. 賛助会員特別会議提言を受けた活動について (岡田) 資料 29-理 4-12
 賛助会員特別会議の提言を受けた講習会の概要について紹介があり、以下の議論があった。

- C. 講習会の会員限定について、賛助会員限定でなく、全会員にすべきだと思う。ILC 研究企画特別委員会では、賛助会員限定だったので、産総研や大学の方から申し込みがあったが断った。今回提案の講習会は、岩盤の基礎学問のボトムアップを目指していると思うので、全会員対象で、先着 20 名くらいで頻度を上げていけばいいと思う。例えば、ワンコイン講習会みたいな形で、参加費 500 円にするのも一案である。
- C. 賛助会員には参加費を割り引けばよい。
- C. 最初は会員のサービスとして始め、結構いいと噂が広まれば、会員ではないが聞かせてほしいという人がいるかもしれない。
- C. まずは軽い感じで、できることからスタートしてはどうか。
- C. 場所を外で実施すると、予約、費用、理事会の承認を得てからとなるとタイムリーに実施できな

- いので、場所は連合会（資源・素材学会）で実施した方がよい。
- C. 全会員対象とすると、参加者も増える可能性が高いし、場所が狭すぎるのではないか。
 - C. RockNet メールで、先着順でよいのではないか。ずっと固定メンバーになる場合は考えないといけない。
 - C. まとめると、全会員対象で、先着 20 名、1 社 1 名限定でどうか。
 - C. 軽く始めるというのはよいが、RockNet に流した途端に軽くはならないと思う。現に土木学会のイブニングセミナーにはすぐ集まる。
 - C. 案内を見た人は軽いか、軽くないかわからないので、賛助会員の方に内輪で雰囲気を含めて情報を流してもらい、まずはスタートさせてはどうか。
 - C. 若い人に来てもらうのであれば、夕方がよいと思う。
 - C. 理事会の後はどうか。
 - C. 賛助会員限定で岩盤の基礎工学を教えるというのは違うんじゃないかと思う。リニアコライダーの意見交換会というのは、リニアというプロジェクトがあるからこそ、賛助会員にはうってつけである。賛助会員には、プロジェクトか、宣伝が必要である。岩盤の力学は必要というのは賛助会員から出た意見であるが、自分たちに教えてほしいという話でないと思う。広く実施して、40～50 人来るならやり方を変えないといけないが、その可能性を心配し、賛助会員から始めるのは賛成できない。
 - C. 好評であれば、同じメニューで 1～2 ヶ月後にまた実施すればよいのではないか。
 - C. 最終的には会員を増やしたいので、先が見えるようにテーマはシリーズにしてはどうか。基礎講座なら例えば 5 回シリーズとしてはどうか。
 - C. 午後に理事会をやるなら、午前に来てくれる人が来ればよいと思う。
 - C. やはり夕方の方がいいのではないか。
 - C. 夕方だと、資源・素材学会の会議室を借りることに對して、問題が生じるのではないか。
 - C. 最初は理事会の前に 90 分くらいとって実施してはどうか。
 - C. では、5 回程度のシリーズで、20 名。時間は理事会の前とそれ以外の日も含めるということでスタートしたい。
 - C. CPD はどうするか。
 - C. CPD は調べてみたが、単独で申し込みれば連合会単独でもできるが、ちょっとお金もかかる。土木学会と共催とすれば、すぐ可能である。
 - C. お試しで始めるのであれば、CPD は無しでもいいのではないか。土木学会と共催ということになると、土木学会に相談したりする時間が必要になり小回りがききにくい。
 - C. 土木学会は、参加人数にカウントされるので歓迎であると思う。
 - C. 土木学会と共催は止めた方がいいのではないか。
 - C. JSRM のオリジナリティーがなくなるのもよくないと思う。
 - C. CPD はカードでポイント記録となると面倒くさいが、自己申告もできる。
 - C. 建設協会でも展示に来たら、紙の証明書を出すだけである。
 - C. 参加証みたいなのがあればいいだけだと思う。それを参加者が自己申告できる。手間暇はかからないと思う。
 - C. では CPD については参加証を出すことにしたい。シリーズ 5 回の最初の先生はどうするか。
 - C. 清水先生にお願いしてはどうか。
 - C. アナウンスは RockNet で。参加者は個人会員、もしくは賛助会員としたい。ただし、1 社 1 名で先着順としたい。
 - Q. 今日の意見を踏まえ、1 回企画書を作ってはどうか。
 - A. 事業計画・予算案の確認もあるので、幹事長の方で案を作ってメールで確認を依頼することとしたい。

12. その他※（新）

来年度に選挙管理委員会を作って次の代議員の選挙を行う必要があり、森岡理事に選挙管理委員長をお願いしたいと考えているがよいかとの意見に対して、異論なく承認された。

13. 今後の予定

- 1) 平成 30 年度第 5 回理事会（書面審議）：平成 30 年 4 月中旬
- 2) 平成 30 年度業務・会計監査：平成 30 年 5 月 11 日
- 3) 平成 30 年度第 1 回常任理事会：平成 30 年 5 月 14～18 日
- 4) 平成 20 年度第 1 回理事会（書面審議？）：平成 30 年 5 月下旬
- 5) 社員総会：平成 30 年 6 月 15 日（金）地盤工学会 地下大会議室

※ 決議・承認事項

以上